

校長室だより～和光高校今昔 第16号 H26. 8. 22

埼玉県立和光高等学校 校長 村田 進

日本一の柔道部

和高40余年の歴史の中で堂々の日本一に輝いたのが、平成11年3月に行われた第21回全国高校柔道選手権大会女子個人57kg級の中西はつみさんであった。和光二中当時から全国の舞台で活躍していた中西さんは、高校入学後厳しい稽古に励みさらに力を付けこの偉業を成し遂げた。新聞等でも大きく報じられ、30周年を間もなく迎える和光高校にとって日本一のタイトルは歴史を彩る快挙だった。



ここに至るまでには、柏又洋邦教諭抜きには語れない。それまで孤軍奮闘していた郷家正志教諭が転出してからは風前の灯のような柔道部。柏又は平成3年、着任直後から心血を注ぎ込んだ指導を行い、平成7年以降は男女それぞれ団体戦・個人戦でも常に錚々たる戦績を残すようになってきた。個人ではすでに荒沢瑞穂（H4）、保坂裕子（H4・5）、藤嶋聡子（H7）が全国大会で活躍しており、中西以降も手塚可奈、富樫洋子、柳原加奈（H12）の3選手が同じく全国大会に出場している。柔道場にはこの当時の賞状が所狭しと飾られており、畳の上での血と汗のにじむ努力の跡が忍ばれる。このうち荒沢・保坂の両名は高校入学後に柔道を始めた初心者であって柏又教諭の卓越した指導力には感服せざるをえない。

さて、実は真の快挙はこの直後に訪れた。

先日まで行われていた2014南関東インターハイで、県代表埼玉栄女子柔道部は団体戦でまさかの2回戦敗退となったが、春を制し選手層も厚いこのチームは今年に限らず常

に全国トップクラスに位置付けられており、今回も23回目の出場を果たし優勝候補の一つであった。この栄の牙城を崩したのが平成13年の熊本インターハイ県予選準決勝の舞台、代表選までもつれ込んだ大接戦を前述手塚・富樫と江草の奮闘で死闘を制し決勝に進出、決勝では大宮工業を破り見事初優勝、和光高校創立30周年の年に大輪の花を添えた



のであった。常勝埼玉栄の12連覇を阻止した新鋭和光高校の記事は大きなインパクトを県内外に与えた。そしてこのチームは全国の舞台でも臆することなく実力を発揮し、強豪校を次々となぎ倒し初出場ながら第5位という素晴らしい結果を残してくれたのである。

余談になるが、中西さんは大学に進んでからは柔道とレスリングの二刀流、レスリングでも2004年に日本選手権優勝、あの吉田沙保里と同じリングで切磋琢磨し、ともにオリンピック出場を目指していた。奇しくも、まだ弱い時代の柔道部に所属していた安生洋二（11期生）も格闘技の道に転向、時代も環境も異なるが、同じ畳の上で頑張っていた二人の卒業生がもう一つの世界でも結果を残している偶然に驚く。また、この項を書くに当たり、記念誌を読み返したが、20周年記念誌と40周年記念誌には柔道部の記載は一切見つからなかった。その分30周年記念誌には、上記の素晴らしい活躍に加え、数え切れない位の記録が燦然と示されている。まさに柏又の12年間に凝縮されている柔道部の輝きであった。

